

妙本寺本『曾我物語』の「是」字の用法とその訓とについて

橋 村 勝 明

一、はじめに

妙本寺本『曾我物語』は、天文十五年（一五四六）日蓮宗僧日助の書写による真名本で、本文には朱墨の訓点が詳密に付されている。その訓点を手がかりにすると、「是」字に墨仮名点の「ク」、朱点のヲコト点「て」を付して、或いは朱点「て」のみを付して「カクテ」と訓するものとみられる用例が存する。その用例数は「是」字全300例中39例存する。

- ・ 於^レ「金石殿」助親^是 候^は 可^レ仕^は「後見」努々不^レ可^レ有^二疎畧^一。
- ・ 義^一
 - ① 二一才三
 - ② 二四ウ一
- ・ 平治^の合戦時^に 生^二御命^一御在^は 今^は 是^は 御在^は 而^一歩^も
- ・ 落^二御^一「譏後」世^は 候^は 申^は
- ・ 伊藤^の九郎^は 兄^の形見^は 後^に 安付^二乳母^一 養^{けり} 其名^は 呼^二御房^一

殿^と「是」經^二日數^一一程^に忌^は 八十日産^成 三十五日^に

② 一〇才8

・ 詠人事^の 哀^不 盡^歎 是^は 乍^レ歎^過行程^に 空送^二年月^一

② 一七才2

その用法についても接続詞、或いは副詞の「カクテ」として用いられているものと認められる。このような状況が存する一方で、室町時代の辞書には「是」字と「カクテ」との関係を見出すことが出来ない。このことから、室町時代を通じて、「是」字と「カクテ」との関係を見出すことが困難であることが予測される。

また、平安鎌倉時代に成立している辞書によっても同様見出せないことから、伝統的な訓であるとも考えにくい。観智院本『類聚名義抄』によると「是」訓に字に「カクノコトク」は存するものの、「カクテ」の訓は記載されていない。

観智院本類聚名義抄

是 上氏コレレコレニ
カ、ルコトヨコシ

コトハ重ルニ スナハチナホシ
カクテノコトトクニタツ

是 コレ和セ（仏中一〇六一）

（仏中九五三）

前田本『色葉字類抄』においても右と同様「是」字に関する記述として「於是」「是（コトハル）」「是コレ」「是（ココニ）」「是非」として掲げるのみで、前述のようなカクテを示す記述はみられない。また、白河本『字鏡集』においても同様、「カカルコト、カクノコトシ、スナハチ、トス、コレ、ヨシ、ココニ、コトハル、ナラシ、ヲホムネ」の各訓を有するが、「カクテ」は見えない。

そこで、妙本寺本『曾我物語』を中心に、中世真名本に於ける「是」字の使用の実態とその背景について考察する。考察の視点としては、真名本を中心として「是」字に関わる訓読と用法と、「カクテ」に関わるその漢字表記と用法との、二つの視点より検討する。

二、中世に於ける「是」字の使用状況について

まず、妙本寺本『曾我物語』で見られた「是」字の訓と用法とについて検討する。

1、「是」字の訓について

真名本に於ける「是」字の全用例数と、「カクテ」と訓読するとみられる用例数は、表1に掲げるとおりである。

表1

資料	是字	
	全用例数	カクテ訓
曾我物語	390	39
神道集	271	19
四部合戦状本 平家物語	304	9
源平闘諍録	38	0
平松家本 平家物語	336	0
大塔物語	14	0
方丈記	3	0

右の表から、「是」字をカクテと訓ずる資料は、『曾我物語』・『神道集』・四部合戦状本『平家物語』であることが知られる。

カクテの用例が存しない資料「源平闘諍録」については、「是」字は全38例存するが、その何れもが付訓の存しない用例かあるいはヲコト点「の」を付して「カクノ」「コノ」と訓読する用例で、用字法としても接続詞、或いは副詞とは認められない。

また、平松家本『平家物語』では、「是」字は「コレ」「コノ」

の「コ」系語としての用法が主で、他に「如是」が1例、繁辞（五）の用例が5例存する。本資料において、カク系の接続詞としては「此」を使用し、「是」字を「コレ」「コノ」として使用するという使い分けが存するようである。例えば、次の用例に付された訓から確認できる。

・三浦方我等鳥一立朝夕此有所我行三浦方馬場 真先懸落（九、三八ウ7）

この他にも「此有程」が1例、「此有」「此有」「此有」が各1例存する。「此」字に対して無訓であるが、先の用例から「カク」系の接続語であろうと考えられる用例として、「此有程」「此有」「此有事」が各1例存する。

但し、1例であるが「此」字に「テ」を付した用例が見られる。

・晨朝鐘之声醒ニ生死之眠 覽覚可レ通 此有欲被レ思夜モ既ニ明（十、二七オ6）

この用例が孤例であること、「テ」のみの付訓であること、他に「カクテ」の確例を得られないことから、その訓について明確な判断は避けたい。

以上、右に掲げた平松家本平家物語の用例を除外すると、表1に掲げた資料で、「此」字をカク系の語として訓読している、あるいは漢字を用いた確例を得ることが出来なかつた。従つて、資料によつて「此」字をカク系の語と訓ずるものと、「是」字をカク系の語と訓ずるもの、という具合に資料を分類することは出来ないが、少なくとも「是」字を「カクテ」と訓ずる資料とそうでない資料とに分類することは可能であろう。

さて、ここまで真名本に於ける「是」字の訓読法を確認した。そして、「是」字を「カクテ」と訓ずるという事象が、古辞書に掲載されている訓の実態とは異なることが指摘できよう。

辞書を同時代における言葉の「規範」と捉えれば、真名本における「是」字の訓読法は「規範」的ではないといえよう。しかし、古辞書の「規範」の枠そのものがどのような資料によつて規定されているのか、ということが問題として考えられる。そこで、より実態に即した形で真名本の資料的性格について検討するべく、他種の資料と比較をすることによつて、真名本の訓読と用字法について検討する。

比較の対象としては、往来物を取り上げる。共時態として検討する為には、漢字文・漢字仮名交り文等あらゆる文献に目を配る必要があるが、まずは表記形態を同じくする資料群である往来物を比較対象とする。

往来物資料としては、「東山往来」「山密往来」「雜筆往来」「十二月消息」「鎌倉往来」「会席往来」「蒙求臂鷹往来」「貴理師端往来」を調査対象とした。⁹⁾ それぞれの用例数は表2に記すとおりである。

表2

資料	是字	
	全用例数	カクテ訓
東山往来	78	0
山密往来	11	0
雜筆往来	1	0
十二月消息	5	0
鎌倉往来	0	0
会席往来	3	0
蒙求臂鷹往来	15	0
貴理師端往来	8	0

表より、「是」字の使用は認められるものの、「カクテ」としての用法は認められない。真名本に於ける「カクテ」の使用は中世の変体漢文（往来物）のそれとは異なるようである。

2、「是」字の用法について

これらの資料の他、「明德記」¹⁰⁾「戦国遺文」¹¹⁾寛永三年版「吾妻鑑」

巻第二¹²⁾について、「是」字を検索しその用法について検討した。その結果、名詞としての用法（コレ）と熟字「是非」とが存するのみで、「曾我物語」に見られるような接続詞・副詞としての用法は存しなかった。

表3

資料	用法		
	名詞	熟字（是非）	
明德記	57	9	
戦国遺文	36	8	
吾妻鑑	42	1	
			計
	43	44	66

以上、検索した範囲に於いては「是」字を「カクテ」と訓読する用例、或いは「是」字を「カクテ」の意で接続詞・副詞として使用する用例は、極限られた資料のみに見られるものといえよう。真名本に「カクテ」訓が見られる資料の成立に関しては、従来その内部徴証によって、関わりが指摘されて来たところである。

「是」字の用法について、比較の資料の一つに「戦国遺文」を使用した。これは、真名本の多くと時代を同じくすることのほか、「曾我物語」「神道集」四部合戦状本「平家物語」の成立に共通して指摘される、東国との関係について検討するためである。つまり、東国に於ける漢字文（書状）の表記に先に真名本において指摘したような事象が共通して見出せれば、資料的な性格の差を捨象した、

「此」字は、「色葉字類抄」においては「ナンチ」「オソロシ」「イナ」「コレ」「ココニ」の各語に相当する漢字として掲出されるのみで、接続詞・副詞としてのカク系語と結びついた用例は「カクノコトク」以外には見出せない。また、観智院本『類聚名義抄』において、次に記す如く見られない。

此 雌氏反コ^レレ^レ
ナムチ ソシルイ^ナナ^レ
(法上九九・六)

此 今此字 雌氏反 コ^レ、^レニ^レ コ^レレ^レ
和シ^レ (僧下六九・八)

「此」字にカク系語が「如此」のみであることは、「是」字の場合と同様である。以上、平安時代末から鎌倉時代にかけては概略ここに述べたような状況である。この時期の変体漢文については仮名交じり文同様カク系語の用例を「如是」以外に確認することが出来なかつた。¹⁶⁾

室町時代の辞書に「カクテ」訓が存しないことは既に指摘したとおりであるが、それより時代を降って江戸時代成立の『合類節用集』(延宝八年(一六八〇)成立)、『書言字考節用集』(元禄十一年(一六九八)成立、初刊行享保二年以前)には各々次の如き記述が

見られる。¹⁶⁾

合類節用集 斯^ナ 又右同 (卷八中④・5)

書言字考節用集 在此^{カクテ} 斯^ナ而^ナ (第九冊言辭八上72・3)

江戸時代初期に於いても、「是」字とカクテとの関係を見出せないばかりか、両書から「斯」字を宛た記述が見られる。「斯」字については、現在のところ十分な検討を経ていない。江戸時代の記述に至るまでの経緯、「是」字との関わりについては、課題としたい。

2、「カクテ」訓を有する「是」字の用法について

「是」字の「カクテ」が真名本の限られた資料に見られることは既に指摘したとおりである。そこで次に、それらの資料に見られる「カクテ」が語の用法上他の資料と比較した場合、差異が認められるか否かについて検討する。方法としては、「カクテ」訓を有する「是」字について、その用法を接続詞と副詞とに分ち、他の真名本と比較する。また、漢字仮名交り文である室町時代成立の『太平記』¹⁷⁾の用法と比較することによって共時態としての語の使用状況との比較の手掛かりとする。各資料の「カクテ」をその用法により分類したものが、次の表である。

表5

資料	用法		
	接続詞	副詞	計
曾我物語	33	6	39
神道集	11	8	19
四部合戦本 平家物語	7	2	9
太平記	51	7	58

表5から、「カクテ」が「曾我物語」・「神道集」・四部合戦本本「平家物語」の三資料において接続詞・副詞の何れかに偏って使用されているというわけではなく、「太平記」同様接続詞或いは副詞として用いられていることがわかる。

四、おわりに

以上の検討より、次の諸点が明らかとなった。

- 一、真名本において「是」字をカクテと訓読することは、古辞書に依る限り、時代を遡っても見られる事象ではなく、真名本に特徴的に認められる訓読である。
- 二、そのような訓読は、用字の段階に於いて接続詞或いは副詞となる用字法が存する必要があるが、それも一部の真名本において見られるのみである。

「カクテ」が和文語であることは先学の説くところである。¹⁸⁾ その、

和文を中心として用いられてきた語が、仮名本から真名本へと表記形態を移行させる際、必ず漢字を使用しなければならぬ状況で、ある種の真名本に於いて「是」字を選択したという事実がまず指摘できよう。

そして、それら「是」字を使用した資料が先行研究によって成立上関係を有するものとされていることを合わせ考えると、先にも指摘した様に、東国成立であるという地域的な問題、真名本「曾我物語」が日蓮宗の一派によって伝えられてきたという学問環境の問題が背景に存しているように考える。そして、それらの問題は、真名本「曾我物語」が伝えられた日蓮宗の寺（妙本寺・本門寺、真名を仮名に改めた本は大石寺に伝わる）が全て東国であることを勘案すれば、右の地域的な問題と学問環境の問題とは互いに関連性を有していることが知られるのである。

「是」「此」の何れかを使用する、あるいは何れかの専用であるという視点からの資料の分類が有効であると認められるならば、今後の真名本研究の上で資料を分類する一指標として認めてよいと考えるのである。¹⁹⁾

注

(一) 真名本の成立過程には、先行形態として仮名本が想定される。従って、厳密な意味で「訓」或いは「訓読」と称することに疑問の余地が残るの

であるが、訓点の性格が明らかにされていない現時点としては、その表記形態から「訓読」と称することとする。

(2) 「て」のみの付訓の場合、観智院本「類聚名義抄」に見える如く「カクテ」「カクノゴトクシテ」の二語が可能性として考えられるが、「カクノゴトクシテ」の確例が存せず、「カクテ」の部分付訓例をもって「カクテ」の確例と認められることから、消極的な根拠ではあるが、これらを「カクテ」と考へる。

(3) 検索に用いた資料を以下に記す。據塚集・頓要集・温故知新書・連歩色葉集(以上「中世古辞書四種研究並びに総合索引」中田祝夫・根上剛士著、風間書房、昭和四六・七・一五)、下学集(東京教育大本・春林本・文明本・前田本・文明十一年本・樽原本・龟田本)以上「古本下学集七種研究並びに総合索引」中田祝夫・林義雄著、風間書房、昭和四六・一・三〇)、節用集(古本節用集六種研究並びに総合索引)(中田祝夫著、風間書房、昭和六三・四・一五)、改訂新版「文明本節用集研究並びに索引」(中田祝夫著、勉誠社、昭和五四・九・三〇))

(4) 次に掲げる点本についても「是」字の訓を確認したが、副詞「カクテ」訓を見出すことが出来なかつた。

〔仏典〕正倉院藏地蔵十輪經卷五・七元慶点(中田祝夫編、勉誠社、昭和五五・二・二〇)、無量義經古点(中田祝夫編、勉誠社、昭和五四・四・一五)、石山寺藏仏説太子須陀摩經(訓点語と訓点資料)七十一・七十三(聯合併号、昭和五九・五)

〔漢籍〕高山寺本論語(高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会、昭和五五・二・二八)

〔変体漢文〕高山寺本古往來(高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会、南無阿弥陀仏作善集(「訓点語と訓点資料」第三八輯)真福寺本将門記(勉誠社文庫13)、中田祝夫解説、勉誠社、昭和六〇・六・

二五)、真福寺藏尾張國解文正中二年点(「訓点語と訓点資料」第八六輯、西村浩子「真福寺藏尾張國解文正中二年訓点索引」、和泉往來(「和泉往來 高野山西南院藏」京都大学国語国文学資料叢書、佐竹昭広編、臨川書店、昭和五六・一二・一五)、雲州往來(雲州往來享禄本研究と総合索引)三保忠夫・三保サト子編、和泉書院、昭五七・三・一)一、天理図書館藏日本往生極樂記(天理善本叢書所収天理図書館本による。検索には宇都宮啓吾「天理大学附属天理図書館蔵「日本往生極樂記」漢字索引稿」(鎌倉時代語研究)第十六輯、武蔵野書院、平成五・五・三〇)を利用)

(5) 以下、漢字の用いられ方を「用字」、仮名に対する漢字の宛て方を「表記」とする。

(6) 検索資料は、以下の通り。『真名本曾我物語』(山岸徳章・中田祝夫解説、勉誠社、昭四九・一〇・二〇)、『神道大系 文学篇一 神道集』(神道大系編纂会編、昭和六三・二・二九)、『四部合戦状本平家物語』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編、汲古書院、昭和四一・三・二五)、『源平闘諍録と研究』(山下宏明編、未刊国文学資料刊行会、昭和三八・三・一)、『平松家本平家物語』(京都大学文学部国語学国文学研究室編、清文堂、昭和六三・五・一〇)、『真字本方丈記』影印・注釈・研究(島津忠夫監修、田賀元子・田野村千寿子著、和泉書院、平成七・一〇・二〇)、『大塔物語』(翁群書類従二輯下)

(7) 四部合戦状本平家物語の用例数は、調査に使用した影印の印刷の具合が悪く、朱点が写っていない箇所があると思われる。今回は用例数を仮名点によって確認できる数を計上した。従って、より細密な調査によって「カクテ」の用例数が増えることもある。

(8) 仏教漢文では、「是」字の用法を、
1 抽象度の高い内容を指示する代名詞(例「如是」)

2 近標の指示代名詞(例「是人」)

3 贅辞(例「是即是也」)

の三種に分類できる(金岡照光「仏教漢文の読み方」(春秋社、昭和五三・一〇・三〇)九六、一九七頁。また、漢籍においても、「是」字の用法を、「主語・客語・介詞句・修飾関係の句等に用いられる」として、左の如く分類できる(牛島徳次著「漢語文法論」大修館書店、昭和四六・一〇・二〇、一六九頁。用例は本書より引用)。

主語 是我起兵時主簿也(これは、わたしが兵を挙げたときの主簿なのだ)

客語 …曰都公！天豈有是邪？(都公！世の中にこんなことであるものなのだろうか)

介詞句 陛下不以是為憂、而當作宮室(陛下はこういことを御心配なさらずに、宮殿を建設なさり、)

修飾関係 是兒・是言・是日

- (9) 「東山往來」「鎌倉往來」「会席往來」「費理師端往來」は「日本教科書大系往來編」第一巻「古往來一」(石川謙編、講談社、昭和四三・二・二二)、「山密往來」「雜筆往來」「十二月消息」「蒙求賢慶往來」については「日本教科書大系往來編」第二巻「古往來二」を参照した。これらの資料の成立年代・書写年代は、「東山往來」の鎌倉時代成立・室町時代写、「雜筆往來」の成立未詳・鎌倉末写から、「費理師端往來」の水禄十一、二年頃成立(「教科書大系」解説)までと、時間的な隔たりが存するが、真名本の成立年代に疑問の余地が存する現状にあつては、検討の対象資料を比較的広く設定したい。

- (10) 成立は、「初稿本が明德三年(1388)五月以降間もない頃」とされる(和田英道「明德記校本と基礎的研究」三〇九頁)。

- (11) 「戦国遺文」第一巻(明応四年(1495)～水禄七年(1564))所収文書全

八六六通を検索対象とする。

- (12) 峰岸明・横濱国大東鑑之会編、笠間書院、昭和五十四・三・二〇

(13) 時代的に遡つて、「御堂関白記」について検討すれば、「是」字は46例存し、内6例が人名の用例である。残りの40例は、全て「これ」或いは指示代名詞である「かく」としての用例であり、接続詞・副詞としての用法は認められない。又、正格漢文に於いて「是」字の接続詞・副詞としての用法を認めることが出来ない(注7)。

(14) 山口佳紀氏は、「古代日本文体史論考」全昔物語集に於いて「カク」の系列(便宜上、他品詞に属するカカル・カクテなどを合せて考える)の語が「和文特有語ということになる」と指摘し、さらに「用例の大部分は巻十二以前にあつて、それ以降は減少に現れない。これは後半ではカクを用いなくなるといふのでは無論なく、「此ク」などと専ら漢字表記されているためである。もつとも「此ク」は天竺部から既に見えるから、ここに表記法の動搖を見て取ることが出来る」と指摘する。

また、峰岸明氏は、「カクテ」を含む「カク」情態副詞を調査した結果、これと同様の結果を導き出し、「今昔物語集」に使用される漢字は、「当時の日常常用漢字群」であると説く(「平安時代古記録の国語学的研究」七四、七七頁)。

- (15) 調査対象とした資料は、注4に掲げた内の変体漢文についてである。

(16) それぞれ「合類節用集研究並びに索引」(中田祝夫・小林祥次郎編、勉誠社、昭和五四・二・二八)、「書言字考節用集研究並びに総合索引」(中田祝夫・小林祥次郎編、風間書房、昭和四八・三・三二)を参照した。

- (17) 西端幸雄・志浦由起恵編「土井本太平記」勉誠社、平成九二・二・二五

(18) 築島裕「平安時代の漢文訓読語」についての研究では、「一般の点本では「カクノゴトク」「カクノゴトキ」を用ゐる」としており、峰岸明「平安時代古記録の国語学的研究」では「和文を基調とする語」(八〇八頁)と

する。また、「古典対照語彙表」によると、徒然(3)大鏡(24)更級(5)源氏(165)枕(3)蜻蛉(62)後撰(3)土佐(7)伊勢(4)竹取(2)万葉(3)の各用例数が確認できる。

(19) 岩波古典文学大辞典には「真名本『曾我物語』・『私察百因縁集』・『平家伝抄』・『宝物集』第二種七卷本と共通する章句が多く、四部合戦本『平家物語』とは、真名本『曾我物語』とともに、特殊な宛字が多く共通する事は、編者を考える要素となりうるが、それらの思想圏・言語圏は特定できない。」(村上学項目執筆、「神道集」の項)とある。

〔付記〕 本稿を成すに当たり、室山敏昭先生、松本光隆先生にご指導を賜った。ここに記し、心より感謝申し上げます。

——はしむら・かつあき、福山大学非常勤講師——